

「コミュニケーション能力」言説の内実とその背景 —新聞読者投稿欄をデータとして—

脇 忠幸
(人間文化学科)

本研究では新聞の読者投稿欄をデータとして、「コミュニケーション能力」がどのように捉えられているのか、こうした言説の流布の背景には何があるのかを追究する。分析の結果、「コミュニケーション能力」の“中身のなさ”と、その言説が生み出す“現実”（期待と圧力）、そしてその前提となる認識が明らかになった。また、その背景にはハイパー・メリトクラシーという現代社会の構造的特徴が関わっていると示唆された。

【キーワード：コミュニケーション能力、言説分析、ハイパーメリトクラシー、個人化】

1. 問題の所在

大学という教育現場で働いていると、“教えたこと（理想） - 教えられること（力量） - 教えるべきこと（規範）”のあいだで葛藤する日々が続く。ひとえに教師としての／研究者としての力不足ではあるのだが、特にそれを痛感するのは、就職活動中の学生と接するときである。一方では近代社会がもたらす様々な問題を認識しておきながら、もう一方でそこに迎合し「機械的化石」（Weber1905/1920）になれと学生の背中を押しているのではないか。自分は一体何を“教育”しているのか。

その葛藤を増幅させる事態が猛烈な勢いで進んでいる。それは「コミュニケーション能力」という用語の膾炙である。近年、企業の採用人事において「コミュニケーション能力」が重視されることはよく知られているだろう。日本経済団体連合会（2016）によれば、当該能力は「選考にあたって特に重視する」項目として12年連続1位を飾っている。しかし、この「コミュニケーション能力」とは具体的にどのような能力を指しているのだろうか。

経団連の調査（前述）を見る限り、企業がこの能力をどのように捉えているのか、定かではない。この点に関する調査（たとえば芳賀・宮原ほか2015）を見ても、挙げられる能力（の構成要素）は総花的で、すべてを持ち合わせる人間が存在するとは到底思えない¹⁾。

学生側も「コミュニケーション能力」が重視されていることは十分に意識しているようだ。町田（2012）によれば、大学生を対象に設定した43の質問項目（能力要素）のうち、すべての項目において65%以上の学生が「企業が重視している」と回答したという。このうち38の項目については、70%以上の学生が「企業が重視している」と回答している。だが、どの能力要素も重視されているという学生側の認識は、企業側と同様に総花的な「コミュニケーション能力」を意味するものだろう。

つまり、学生は“社会人”として何を求められているのか、何を努力すればよいのか、実は誰も

答えを持っていないのではないかと、という疑念が晴れないままなのである。平田（2012）は世間に流布するこの「能力」を「胡散臭い」と評しているが、誰一人よくわかっていないものを要求し／要求されているということであるなら、そのような不条理が許されてよいはずがない。はたして今の日本において、「コミュニケーション能力」とはどのようなものとして捉えられているのだろうか。

そこで、本研究では以下の2点を目的とする。

- 1)新聞の読者投稿欄をデータとして、近年の日本において「コミュニケーション能力」がどのように語られているのかを分析し、考察を加える。
- 2)上記1)の結果をふまえて、なぜ他の何かではなく、「コミュニケーション能力」について語られるのか、考察をくわえる。

注意しておきたいのは、本研究の目的は当該能力の定義やその構成要素の確定といったものではない、ということである。そうした従来の議論の相対化と「コミュニケーション能力」言説の解明こそが、学生を取り巻く期待（圧力）の分析に欠かせないと考える。

2. データと方法

本研究では、「コミュニケーション能力」を言説として捉え分析を行う²⁾。同様の分析を試みたものとして、中西（2013）が挙げられる。中西（2013）は「朝日新聞記事データベース 聞蔵Ⅱ」を利用して、「コミュニケーション能力」を含む記事件数を調査した。その結果、この用語は1980年代後半から散見され始め（1～5例程度）、1996年以降格段に増加している。特に2004年の増加は顕著であり、中西（2013）は経団連調査（前述）開始の影響を指摘する。

本研究でもこれにならい、「朝日新聞記事データベース 聞蔵Ⅱ」をデータとして利用する。ただし、すべての記事を対象とするのではなく、朝日新聞の読者投稿欄「声」のみを扱う。これは、いわゆる知識人や社説などの言説ではなく、より一般的な言説を対象とするためである。そのほかの検索条件などもあわせて、以下に記載する。

対象データ：「朝日新聞記事データベース 聞蔵Ⅱ」、朝日新聞「声」欄（地方版含む）

対象期間：2015年10月31日～2017年10月31日（2年間）

検索キーワード：「コミュニケーション能力」「コミュニケーション力」

ヒット件数：20件

ヒットした20件すべてを対象として、「コミュニケーション能力」がどのように語られているか、当該能力は何であって何でないのかを分析する。もちろん、朝日新聞という（ある程度）権威

的なメディアにおける言説であること、一方で今現在、新聞というメディア（の言説）がどれほどの力を持ちうるのかなど、“一般的な”言説としての適切性と代表性については検討の余地があるだろう。今後の課題としたい。

3. 分析と考察

収集した 20 件すべてを下記表にまとめた。性別についての情報は記事に記載されておらず、氏名からある程度の想定は可能だと考えたものの、正確を期して項目として設けなかった。各言説については「コミュニケーション能力」「コミュニケーション力」というキーワードの部分を中心に、前後の文脈を適宜補いながら抜粋した。概観したところ、居住地や年齢、職業に偏りはなくようである。仮に今後データ数を増やすとすれば、特集のテーマによる偏り（例：10 代の主張を聞く）も考慮にいれなくてはなるまい。

	居住 地域	年齢	職業	タイトル (記事の日付)	言説 (部分) ※印は協の注釈
1	岩手	63 歳	無職	人と触れ合う力を育むのが 教育 (2016 年 1 月 14 日)	人と触れ合い、遊びを体験する時間を増やしてあげること。これこそが、 コミュニケーション力 を養う、質の高い子育てだと思います。 (略) 全国の小学校に英語の時間が導入され、 コミュニケーション能力 を高める、といったことがうたわれました。(※「本末転倒」との主旨)
2	長崎	54 歳	セラピスト	介護離職ゼロにはまず賃上げを (2016 年 1 月 15 日)	(※介護職への外国人の受け入れに不安) 身体介助と心のケアには高い コミュニケーション能力 が求められるからだ。
3	神奈川	39 歳	介護福祉士	介護職、報酬増より質向上が先 (2016 年 3 月 1 日)	(※介護職は誰でもできるとおもうかも) だが、介護職は繊細な コミュニケーション能力 や医学的な知識、介護技術など幅広い能力が必要な仕事だ。
4	静岡	73 歳	無職	デジタル教科書は心配も多い (2016 年 4 月 29 日)	また、ネット依存の誘発も心配だ。現在の児童や生徒はただでさえ、社会性や コミュニケーション能力 に欠けるところがあるといわれる。

5	愛知	21 歳	大学生	ボランティアで物の伝え方 学ぶ (2016 年 6 月 3 日)	(※ボランティアグループのリーダー になった。) 見知らぬ私たち 5 人が共通 認識を持たないと、うまく対応できな い。それには、イメージを視覚で表す見 取り図が大きな力になると考えた。(略) 今後も コミュニケーション能力 を磨き 人の役に立ちたい。
6	福岡	20 歳	大学生	コミュニケーション力つけ るぞ (2016 年 6 月 24 日)	企業が就活生は コミュニケーション力 が足りないと考えていると大学の就職 指導で知り、来年の就職活動に向け、ど うしようかと悩んでいたからだ。私は語 彙が少なく、自分の考えを分かりやすく 伝えることが苦手だ。日常の様々な場面 で コミュニケーション力 の低さを感じ ることが多かった。
7	福岡	56 歳	産業カウ ンセラー	北九州市の子ども食堂に期 待 (2016 年 7 月 5 日)	(※家庭に事情がある子どもたちに食 事を提供する「子ども食堂」) 他人に相 談するという事は、意外に難しく、要 点を的確に伝える技術を要するものだ。 子ども食堂で多くの様々な人と出会い、 会話し、学ぶことで、子どもたちが学力 や コミュニケーション力 をアップさせ てくれたらうれしい。
8	山梨	21 歳	大学生	言葉の温かさを届けられる (2016 年 7 月 9 日)	スマホの普及で若者の コミュニケーシ ョン能力 が低下していると言われます。 でも、私はそうは思いません。若者なり に、言葉の持つ温かみを生かしたコミュ ニケーションをしているからです。好意 を寄せる異性とのメールやLINE でのや り取りは、相手の反応を考え、緊張しな がら文章を書く楽しさがあります。
9	長崎	49 歳	中学校教 員	思い伝える力、低下してない か	日ごろ接する中学生たちの コミュニケ ーション能力 が低下していると危惧し

				(2016年8月10日)	ている。気持ちをうまく表現できず、誰彼となく怒りをぶつけたり、人の意見に全く耳を貸さなかったり。人と交わらず、堂々と「一人の方が楽です」と言う生徒もいる。
10	岐阜	18歳	高校生	意思疎通に大事なものを学んだ (2016年9月9日)	(※バスで中国人女性がおばあさんに席を譲ったのを見た)しかし、このバスの中の出来事で、コミュニケーションとは、話すことだけではないと感じた。言葉が違って身ぶり手ぶりで、ある程度は相手に自分の意思を伝えることができる。4年後には東京五輪が開かれ、多くの外国人が訪れる。彼らに日本滞在を楽しんでもらうため、迎える私たちが語学力と共に コミュニケーション力 を高めることが重要だと思った。
11	京都	37歳	看護学生	スマホアプリでみんな笑顔 (2016年9月15日)	(※スマホのアプリを家族で楽しんでいる)スマホは コミュニケーション能力 を下げるのではないかと問題視される一面もありますが、このような使い方、小学生の子供から65歳を過ぎた親世代までが大笑いできることはいいことだなと思いました。
12	三重	56歳	高校教員	英文法は必要な人が学べばいい (2016年9月28日)	学校で身につけるべきは、社会に出て生きるのに必要な力でしょう。社会で最も求められるのは コミュニケーション力 。人の話をしっかり聞き、自分の考えをわかりやすく語る力だと思います。
13	愛知	30歳	嘱託社員	英文法と会話・作文、一体授業に (2016年10月13日)	私も中高生の頃は、英語教育で重要なのは コミュニケーション力 で、会話中心の授業が良いと思っていました。先生に「会話をするにも文法が必要だ」と言われても、実感がわかりませんでした。

14	北海道	55歳	養護学校 教諭	スマホ育児、視力以上の問題 点 (2017年2月19日)	「スマホ育児」に不安を持つ親は9割を超え、そのうち6割ほどが視力の心配をしているという。私は「えっ？」と驚いた。一番の問題は、 コミュニケーション能力 への影響ではないのだろうか。 (略)「スマホ育児」をされた子が、思春期になってコミュニケーション障害や引きこもりになれば、本人も親も「何が原因だろうか」と苦悩することになるかもしれない。そんな「スマホ育児世代」を生み出すべきではない。
15	不明	不明	大学教員	人間力の養成が大切 (「進学を諦めなくて済む社会に」という投稿に対するコメント) (2017年3月15日)	では、大学の存在意義とは何か。人との関わりの中で様々な問題に取り組む コミュニケーション力 、もつといえれば人間力を養うことです。社会や人生で問題があった時、いち早く発見し、修正できる力が必要だからです。
16	神奈川	55歳	大学講師	コミュニケーション力には 手話 (2017年3月28日)	(※タイに旅行した際、片言の英語で交流している人よりも、手話で交流している人のほうが楽しそうだった。)日本語とタイ語の手話は違うはずなのに、どうして仲良くなれたのか。きっと手話を使う人たちは、コミュニケーションとは何かを知っている。身ぶり手ぶりで何とか意思を伝えようという気持ちがあるから、理解できるのだ。 小学校の英語教育が強化されようとしているが、語学力と コミュニケーション力 はイコールではない。小学校の3～4年生くらいまでは、英語よりも手話を教えた方がいいような気がする。
17	大阪	13歳	中学生	若い世代 セルフレジで感じた寂しさ	全て機械になってしまうと、レジを打つ店員さんの優しい気づかひもなくなり

				(2017年4月7日)	ます。そういうちょっとしたふれあいが減ることで、私たちは コミュニケーション力 を失ってってしまうかもしれません。
18	広島	48歳	教育アドバイザー	「空気を読む」より大事なこと (2017年4月18日)	コミュニケーション力 など総合的な力をつけることを目的とした教室で講師をしている。(略) 我がこととしてとらえ、仮説を立てながら物事を多面的に考えたり、優先順位を考え主体的に行動したりする教育が必要だと改めて感じる。
19	不明	不明	タレント	気遣いプラス発信力を (「和の心って？」というテーマのもと寄せたコメント) (2017年5月13日)	それと、発想が同じで物足りなく感じるときもあります。気遣いの文化を守りつつ、相手の気持ちが読め、かつ自分の思いを発信して相手からも引き出す コミュニケーション力 を身につければ、日本人は無敵ですよ。
20	大阪	11歳	小学生	若い世代 考える力、技術発達で低下？ (2017年7月14日)	思考能力は コミュニケーション能力 にも関わります。例えばメールで絵文字ばかり使って気持ちを表していると、実際に言葉で表すのが難しくなってきます。言葉で考える力が低下すると、人間関係をつくるのが複雑になるのではと考えました。

以上の言説において語られている「コミュニケーション能力」とはどのようなものであろうか。結論から先に述べれば、当該能力がどういった「能力」であるのかはよくわからない。漠然とした関連性は見えてくるものの、結局のところ総体的であって、明確な内実は見出せない。それはまるで連想ゲームのようであり、「コミュニケーション能力」の周囲をぐるぐると回り続けるだけで、肝心の内実はいっこうに見えてこないのである。

3.1. 「プラスチック・ワード」としての「コミュニケーション能力」

「コミュニケーション能力」の“中身のなさ”について、もう少し具体的に見てみよう。たとえば、例1において、当該能力は【人と触れ合い、遊びを体験する時間を増やしてあげること】で

養われ、【質の高い子育て】の実践に深く関わるとされている。しかも【(小学校での) 英語では身につかない】能力なのだという。例2では【身体介助と心のケアに求められるもの】とされており、例3では【介護職に必要な能力】、例4では【現在の児童や生徒に欠けているもの】、例5では【イメージを視覚で表す見取り図を作る】ことと関わり、【磨く】と【人の役に立つ】ことができるのだという。しかし、「コミュニケーション能力」自体についての決定的な説明は見当たらない。これは単なる説明不足として解釈すべきことなのだろうか。

この現象が単なる説明不足として発現しているのではないということは、他の事例にも目をやることでより明確になるだろう。例6～例20では、「コミュニケーション能力」とは以下のような／ようでないものとして語られている。

【企業が就活生に足りないと考えているもの】【語彙の量と自分の考えを分かりやすく伝えることと関わるもの】【要点を的確に伝える技術と関わるもの】【多くの様々な人と出会い、会話し、学ぶことでアップするもの】【スマホの普及によって低下する／していると言われるもの】【当該能力が低いということ＝言葉の持つ温かみを生かしたコミュニケーションがとれる】【中学生において低下しているもの】【当該能力が低いということ＝気持ちをうまく表現できず、誰彼となく怒りをぶついたり、人の意見に全く耳を貸さなかったり、人と交わらず堂々と「一人の方が楽です」と言う】【言葉が違って身ぶり手ぶりで、ある程度相手に自分の意思を伝えられること】【社会で最も求められるもの】【人の話をしっかり聞き、自分の考えをわかりやすく語る力】【英語教育で重要だとかつて思っていたもの】【会話と関わるもの】【文法ではない】【スマホによって低下するとコミュニケーション障害や引きこもりになるもの】【人との関わりの中で様々な問題に取り組む力】【人間力と深く関わる】【社会や人生で問題があった時、いち早く発見し、修正できる力】【語学力ではない】【ちょっとしたふれあいが減ることで失ってってしまうかもしれないもの】【総合的な力】【我がこととしてとらえ、仮説を立てながら物事を多面的に考えたり、優先順位を考え主体的に行動したりする力】【相手の気持ちが読め、かつ自分の思いを発信して相手からも引き出す力】

ここで問題にしている「コミュニケーション能力」をめぐる“中身のなさ”“説明不足”は、投稿者のミスや力量不足で偶発的に起こったものではなく、当該能力が内実の無いまま言説化（「プラスチック・ワード」：Pörksen1988/1995）していることに起因すると考えられる³⁾。プラスチック・ワードの出自と権威の源は“科学”であるとされていることから、本研究で問題にしている社会状況の成立にはコミュニケーションに関する学問が深く関わっているのだろう。それが“意図せざる結果”だったとしても、われわれ研究者がもたらした“罪”として批判的に検証されるべきである。この点に関する詳細な議論については紙幅の関係で別稿に譲りたい。

おそらく、投稿者たちもこの言説を何だかよくわからないままに生み出し続けているのだろう。「コミュニケーション能力」という言葉を用いることで、それなりの思考を経ているかのように思える／思わせることが可能となり、その前提（「コミュニケーション能力」とは何か）への問いを封じられる。こうした状況から見て取れるのは、思考の空洞化であり、思考によって言説を（再）生産するはずの主体の空洞化である。よくわからぬままに誰かの期待（圧力）＝価値規範に従い、誰かの言説によって生み出された言説を再生産し、それがまた誰かの言説再生産を引き起こす。結局、「コミュニケーション能力」とは一体何なのかも、その「誰か」とは誰のことなのかもわからないまま、である。

3.2. 達成不可能な期待としての「コミュニケーション能力」とその前提

ここまでの分析で「コミュニケーション能力」の“中身のなさ”が見えてきた。一方で、それは“無意味”を意味しない。微かに科学の権威をまとった言説は、どのような現実として私たちの前に立ち現れているのだろうか。

改めてデータを確認してみると、投稿者たちの言説を可能にする前提として、「コミュニケーション能力」が低下した／している」という認識が含まれていることがわかる。たとえば、【スマホの普及によって低下する／していると言われるもの】（例 8）、【中学生において低下しているもの】（例 9）、【スマホによって低下するとコミュニケーション障害や引きこもりになるもの】（例 14）、【ちょっとしたふれあいが減ることで失っていつてしまうかもしれないもの】（例 17）、という内容やその記事タイトルが「コミュニケーション能力」の低下」とそれに対する危機感を示している。

こうした「低下＝危機」言説は様々なメディアによって喧伝されているように思う。しかし、実際に「低下した／している」と言えるのだろうか。この点について、大久保ほか（2014）は次のように指摘している。

暗黙の前提としてコミュニケーション能力の低下が述べられているが、現代の子どもたちのコミュニケーション能力が「低い」というデータは明確に確認されていない。つまり、現代の子どもたちのコミュニケーション能力が「低い」という事実が確認されないまま、研究が行われているのである。（pp.93-94）

こうして大久保ほか（2014）は、「社会的スキル尺度」による過去（1993年&1996年）との比較（対象：小学校5年生）と、「コミュニケーション能力」に関する質問紙調査（対象：大学生と専門学校生）を実施している。その結果、「社会的スキル」のうち、約60%は「変化なし」、約40%は「（現在の子どものほうが）高い」ということがわかった。一方で、質問紙調査によって、「コミュニケーション能力」が低下しているという認識が多い（半数以上）ことと、「教育実習の経験あ

り」の学生は、子どもの「コミュニケーション能力」は高いと評価していることもわかった。つまり、実態としての「低下＝危機」は否定されたが、言説としての「低下＝危機」は確認されたということだろう。

しかし、そもそも「コミュニケーション能力」が茫漠としている以上、その「低下」という議論が的を射たものになるわけがない。よくわからない何かの度合いを議論するなど、無理難題以外の何ものでもないだろう。大久保ほか(2014)では、「コミュニケーション能力」を「社会的スキル尺度」に置き換えることで、この問題を回避しようとしている。こうした「コミュニケーション能力」の要素還元は学術的には“正当な”手続きだと言っていいだろう⁴⁾。

この学術的な要素還元と今回のデータをいづれも「コミュニケーション能力」言説として捉えることで、これらの言説が依拠する前提(認識)とそれによってもたらされる“現実”(認識の構築と維持)が浮かび上がってくる。以下、こうして見えてきた三つの前提(認識)、すなわち①「コミュニケーション能力＝スキル＝向上可能」、②「コミュニケーション能力＝計測可能」、③「コミュニケーション能力＝重要」について考察をくわえる。

まず、①「コミュニケーション能力＝スキル＝向上可能」から話を始めよう⁵⁾。大久保ほか(2014)の成果は前述の通りだが、ここで注目すべきはその議論の前提、すなわち当該能力がスキルだという認識である。この「コミュニケーション能力」＝スキルという図式は、学術的な議論でよく見られる便宜的な置き換えのひとつであり、常に相対化しうる／すべきものだ。スキルとは訓練次第で向上する技術であり、論理的な帰結として「コミュニケーション能力」＝「努力すれば向上可能」という図式を生み出す。研究者が提示する「本当に低下しているのか」という問いは、一見「コミュニケーション能力」を相対化しているように思えるが、結局のところこの図式＝価値観から一歩も抜け出せておらず、当該能力を操作可能なスキルとして認めるものである。興味深いのは、同様の認識が投稿欄のデータからも見てとれることである。投稿者の言説として現れた、【高める】(例1・例10)、【下げる】(例11)、【磨き】(例5)、【伝える技術】【アップさせて】(例7)、【低下】(例8・例9)、【身につける】(例12)などの表現は、投稿者たちが「コミュニケーション能力＝スキル＝向上可能」という認識を前提として言説を再生産していることを示している。

もう少し踏み込んで考えてみれば、「努力すれば向上可能」という認識は、自分自身と周囲に向けられた社会的な期待を意味する。すなわち、「努力すれば向上可能なことから、努力すべき」という期待であり、価値観である。例9に見られるような【コミュニケーション能力が低下していると危惧している】といった言説は、決して個人の主張にとどまらず、期待からの逸脱(努力しないこと)への圧力として機能する。だが、一体どのような努力をすればよいと言うのだろうか。内実が伴わず誰も把握できていないものを向上させるなど、できようはずがない。達成不可能な事柄を【社会で最も求められるもの】(例12)として課し、それが達成できないと【就活生はコミュニケーション力が足りない】(例6)などと努力不足(＝自己責任)として非難されるのは実に不条理極まりない。

こうした認識と表裏一体の関係にあるのが、②「コミュニケーション能力＝計測可能」という認識である。先ほどからくり返し確認しているように、「コミュニケーション能力」言説は当該能力を度合い（高・低）で捉え、尺度作成を許容する認識や価値観を再生産し続けている。これもくり返しになるが、よくわからない何かを度合いで示したり尺度で測ったりするなどということは無理な話である。貴戸（2011）も当該能力を「測定不能でどうやって身につけるか分からない曖昧な「能力」」（p.4）としたうえで、「「コミュニケーション能力」は英語力のように TOEIC のスコアで測れるものではありません。私はあの人と比べて「能力」が高いのか低いのか、どうすれば「能力」を高めることができるのかが、そこでは不透明です。」（p.4）と指摘する。にもかかわらず、投稿者たちが持つ計測（数値化）への志向は明らかである。なぜ当該能力を計測の対象とするのかについては、第4章でも触れる。

最後に指摘したいのは、③「コミュニケーション能力＝重要」という前提（認識）についてである。投稿者たち（研究者も）の言説はいずれも「コミュニケーション能力」の重要性を暗黙の前提としており、【子育て】【介護】【ネット依存】【就活】【学力】【スマホの普及】【東京五輪】【教育】【文化】【思考能力】など多岐にわたる事柄を「コミュニケーション（能力）」と結びつけて語っている。もはや“社会のコミュニケーション学化”“コミュニケーション学化する社会”とでも呼べそうな様相を示している。もちろん、コミュニケーションが社会（私たち）にとって重要どころか必須要件であるということは、言うまでもないだろう（Luhmann1984）。しかし、改めて考えると、なぜ他の何かではなく「コミュニケーション」がわざわざ語られるのだろうか。それを可能にする社会状況とはどのようなものなのだろうか。

4. なぜコミュニケーションが問題になるのか

ここまでの分析によって、「コミュニケーション能力」の“中身のなさ”と、その言説が生み出す“現実”（期待と圧力）、そしてその前提となる認識の一端が明らかになった。改めてデータを見てみると、【人の話をしっかり聞き、自分の考えをわかりやすく語る力】（例12）のように、当該能力の具体的な説明として機能しうる言説も存在する。しかし、それが当該能力とイコールであるなら、わざわざその力を「コミュニケーション能力」と名付ける必要はない。同様のことは投稿者が語るほかの「力」に対しても指摘できるだろう。なぜ「コミュニケーション能力」という表現が用いられるのだろうか。なぜ、コミュニケーションが問題になる／なってしまうのだろうか⁶⁾。

この問いに答えるために、本田（2005）の「ハイパー・メリトクラシー」という概念を導入する。これまで様々な研究者によって、メリトクラシー（業績主義）と官僚制が近代社会の特徴のひとつとして指摘されてきた（たとえば Persons1951）。近代社会では能力評価の客観性が重視され、能力＝業績の数値化が進んだとされるが、本田（2005）によれば、現代社会では新たに「ポスト近代型能力」が評価対象（数値化の対象）となっているという。どのような能力なのかについて、簡単にまとめると以下の通りである。

「ポスト近代型能力」

- ・「生きる力」に象徴されるような、個々人に対して多様でありかつ意欲などの情動的な部分を多く含む能力。
- ・努力やノウハウとはなじまない性格のもの。
- ・どのように形成されるのかについて社会的に合意されたセオリーはいまだ確立されていない。
- ・どうすればそれを手に入れられるのか、誰にもはっきりとはわかっていない。

本田 (2005) はこうした能力 (具体例として「コミュニケーション・スキル」も挙げられている) が求められる現代社会の特徴を「ハイパー・メリトクラシー」と呼ぶのである。本研究で分析してきた「コミュニケーション能力」は、まさにこの「ポスト近代型能力」のひとつと見てよいだろう。

つまり、「コミュニケーション (能力)」が語られるようになったのは、社会構造レベルの変化 (メリトクラシーからハイパー・メリトクラシーへ) に起因するということである。ではなぜそのような変化が起きたのだろうか。このような茫漠とした「能力」⁷⁾について語ることで、社会 (私たち) は何をしようとしているのだろうか。

今はこの問いに明確な回答を提出することはできないが、今後の突破口となりそうな概念として、貴戸 (2011) の「関係性の個人化」が挙げられる。これは「他者や場との関係によって変わってくるはずのものを、個人の中に固定的に措定すること」(p.3) を意味する概念で、「コミュニケーション能力」言説はその過程で利用されるという。本来、コミュニケーションは二人以上の当事者のあいだに生じる＝個人に還元できないはずなのに、「コミュニケーション能力がある／ない」という言説によって、対人関係上の事象や問題が個人要因に還元されてしまう。こうした現状に貴戸は警鐘を鳴らすのである。

この指摘は、3.2.での「コミュニケーション能力」＝「努力すれば向上可能」(自己責任) という議論と重なるだろう。稿者の議論の背景には、ギデンズやベックに代表される後期近代 (再帰的近代) 論があるのだが、貴戸の指摘する「個人化」は彼らが追究した現象のひとつである。「コミュニケーション」に関する言説がこれほどまでに現れることについて、またそれが“社会のコミュニケーション学化”“コミュニケーション学化する社会”と呼べるほどの現象なのかについては、稿を改めて論じたい。

5. おわりに

本研究で明らかになったことを、第1章で挙げた目的 (2つ) と照らし合わせながら、以下にまとめる。

- 1) 新聞の読者投稿欄を分析することで、近年の日本で語られる「コミュニケーション能力」の“中身のなさ”と、その言説が生み出す“現実”（期待と圧力）、そしてその前提となる認識が明らかになった。「コミュニケーション能力」はその内実が伴わないままに、「スキル＝向上可能」「計測可能」「重要」なものとして語られていた。
- 2) このような言説の（再）生産は、ハイパー・メリトクラシーという現代社会の構造に起因すると考えられる。後期近代の特徴にも通じる「関係性の個人化」も関わっていると考えられるが、詳細な分析には至らず課題として残った。

このほかにも、投稿者だけでなく研究者もこうした言説の渦に巻き込まれ、無自覚のうちに言説とそれに内包された認識に影響を与え（られてい）ることが見えてきた。換言すれば、稿者と本研究もその渦の中にあるということだろう。今後は、新聞投稿欄といういわゆる一般的な言説だけでなく、学術論文や企業、教育行政などの言説も分析する必要がある。また、それらに取り囲まれる大学生たちの言説も重要な鍵となるだろう。

本田（2005）は「あとがき」において、自らの論証が「不十分」で「粗い」と認めつつも、「その症状が進みすぎて手遅れにならないうちに、それを対象化・相対化し、「出口」を探しておくことが、ぜひとも必要」だとして、ハイパー・メリトクラシーに陥る現代社会へ警鐘を鳴らしている。10年以上が経過した現在、今回のデータを見る限り、事態は悪化しているように見える。「コミュニケーション能力」への盲信は未だ強く、対人関係に限らず多くの問題がコミュニケーションと結びつけて語られる（たとえば「コミュ障」）。本研究の結果を見ると、「コミュニケーション能力」言説がもたらす“現実”は、もはや“ブラック社会”と呼ぶにふさわしい状況にあるのかもしれない。教育現場においてすべきこと／できることは果たして何であろうか。

註

- 1) 芳賀・宮原（2015）によれば、企業側が考える「コミュニケーション能力」とは以下の7つ。
 - ・「コミュニケーションの双方向性」…発信力と受信力のバランスがとれている。
 - ・「発信力」…話の核とタイミングを押さえ、論理立てて話すことで、相手に要点を明確に伝えることができる。／本質を理解して発信できている。／相手を話に巻き込むことができる。
 - ・「アクティブ・リスニング」…積極的に相手の話を理解しようという姿勢を持つ。不明なことは明確にする。
 - ・「コミュニケーションの基盤」…組織の一員として倫理観かつ礼節をもって意思疎通が行える。／ある程度の自己開示によって、相手との距離を近づけることができる。／対立を恐れず、伝えるべきことをしっかりと伝える。

／全体像をきちんと把握し、周囲の状況を客観的に捉えることができる。
／自分の言いたいこと、言うべきことをしっかりと文章で表すことができる。

- ・「率直性」…遺恨を残さず率直に話すことができる。
- ・「曖昧さの回避」…物事を曖昧にせず、結論を明確にする。
- ・「報告の重要性」…タイミング、順番、中身の信憑性などに配慮し、データに基づき論理的に報告する。

2) 本来であれば「言説」なのか「言表」なのかという概念整理の後に、こうした具体的な分析がなされるべきなのかもしれない。たとえば Foucault (1969) は「言説の原子」として「言表」を設定しながらも、そこに自ら問題点を見出し詳細な検討を展開している。しかし、彼のような徹底した概念整理をすることが本研究の目的に沿うとは考えていない（反するとも思わないが）。今回は、紙幅の関係もあり、「言説」の明確な定義についてはこれ以上立ち入らず、「言表」は用いない。

3) 本研究と同様に、中西 (2013) も「コミュニケーション能力」をプラスチック・ワードとして捉えている。Pörksen (1988/1995) によれば、プラスチック・ワードとは「科学の領域でうぶ声をあげるか、科学の領域を通ってくる」「具体的なコンテキストで使われたとき、どんなに詳しく規定しても、正確に何をいつているのかを見定めることができない」「正確さ、具体性、厳密性へと向かういかなる潜在的可能性をも失っている」言葉を指す。Pörksen (1988/1995) が挙げたプラスチック・ワードの具体例には「アイデンティティ」「近代化」などにくわえて「コミュニケーション」も含まれており、「コミュニケーション能力」はそもそもよくわからない言葉（「コミュニケーション」）に屋上屋を重ねるようにして生まれたのかもしれない。

また、柳父 (1982) は同様の現象を翻訳語としての漢字使用に見出し、「カセット効果」と呼んでいる。こうした「よくは分らないが、何か重要な意味があるのだ」（柳父 1982, p.36）という村度のもと、話者が言説を実体化し価値あるものとして振りかざす状況は、言語や地域を超えて見られることがわかる。

4) たとえば工藤 (2013) や第 1 章で触れた芳賀・宮原ほか (2015) などはこの要素還元を目的としている。また、心理学には「尺度集」（堀（監修）2001-2011：もちろん「コミュニケーション能力」に関する事柄以外の尺度も多数収められている）が存在することもよく知られているだろう。

5) 当該能力がスキルへと置き換えられる事実については、平田 (2012) が「世間でコミュニケーション能力と呼ばれるものの大半は、スキルやマナーの問題と捉えて解決できる」（p.30）と指摘をしている。しかし、彼の指摘はあくまで彼個人の経験にもとづくものであり、本研究のような分析は経ていない。

6) より抽象化すれば、「他のいかなる言表でもなくこれこれの言表がそれ自身の場所に現れたということ、こ

れはいったいどういうことなのか、という問い」(Foucault1969, p.56)となる。

7) 例 15 で挙げられている【人間力】もこの「能力」のひとつだろう。“人間である力”とは一体何なのか、適切な回答のできる人間がいるだろうか。この摩訶不思議な「力」が、「コミュニケーション能力」について【もっといえば】という文脈で現れたことも、それぞれの“中身のなさ”を表しているだろう。牧野(2012)が「力」をめぐる表現の流行(p.190)と指摘したように、こうした「〇〇力」言説は今なお生み出されている(たとえば「女子力」)。おそらく、どれも内実を伴わないものだとは推測される。

参考文献・URL

- Foucault, M. 1969. *L'Archéologie du savoir*. Paris: Gallimard. (=2012, 慎改康之訳『知の考古学』河出文庫)
- 芳賀日登美・宮原哲ほか, 2015. 「日本において企業が考えるコミュニケーション能力とは—半構造化面接法による探索的研究—」, *Aoyama Journal of Interactional Studies*. 2, pp.81-101.
- 平田オリザ. 2012. 『わかりあえないことから—コミュニケーション能力とは何か』講談社現代新書
- 本田由紀. 2005. 『多元化する「能力」と日本社会 ハイパー・メリトクラシー化のなかで』NTT出版
- 堀洋道(監修). 2001-2011. 『心理測定尺度集 I～VI』サイエンス社
- 貴戸理恵. 2011. 『「コミュニケーション能力がない」と悩むまえに 生きづらさを考える』岩波ブックレット
- 工藤俊郎. 2013. 「大学生に有用なコミュニケーション能力の測定研究(質問紙調査分析から得た尺度の有効性の検討)』『リメディア教育研究』8-1, pp.147-161.
- Luhmann, N. 1984. *Soziale Systeme: Grundriß einer allgemeinen Theorie*. Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=1993-1995, 佐藤勉監訳『社会システム理論(上・下)』恒星社厚生閣)
- 牧野智和. 2012. 『自己啓発の時代「自己」の文化社会学的探究』勁草書房
- 町田佳世子. 2012. 「就労期を迎えた北海道の若者のコミュニケーション能力実態調査—道内企業の期待との比較—」『助成研究論文集』, pp.187-206.
- 中西満貴典. 2013. 「言説としての「コミュニケーション能力」の諸言表 支配的言説の脱構築のための予備的研究」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』62, pp.9-15.
- 大久保智生・澤邊潤・赤塚佑果. 2014. 「「子どものコミュニケーション能力低下」言説の検討—小学生と大学生を対象とした調査から—」『香川大学教育実践総合研究』29, pp.93-105.
- Persons, T. 1951. *The social system*. London: Routledge & Kegan Paul. (=1974, 佐藤勉訳『社会体系論』青木書店)
- Pörksen, U. 1988/1995. *Plastic words: the tyranny of a modular language*. University Park, Pennsylvania: The Pennsylvania State University Press. (=2007, 糟谷啓介訳『プラスチック・ワード 歴史を喪失したことばの蔓延』藤原書店)
- Weber, M. 1905/1920. *Die protestantische Ethik und der "Geist" des Kapitalismus. Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, Bd. 1., ss. 17-206. (=1989, 大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の

精神』岩波文庫)

柳父章. 1982. 『翻訳語成立事情』岩波新書

日本経済団体連合会. 2016. 「2016年度 新卒採用に関するアンケート調査結果」

<http://www.keidanren.or.jp/policy/2016/108.html> (2017年9月13日アクセス)

付記

本研究は、第19回日本コミュニケーション学会中国四国支部年次大会(2016年12月、於福山大学)における報告の一部を改稿したものです。席上ご意見いただいた先生方に御礼申し上げます。

The Fact and Background of “Communication Competence”: Using Data from Newspaper
Reader’s Columns.

Tadayuki WAKI

The aim of this article is to analyze the fact and background of “communication competence”. It should be noted that “communication competence” has no contents. The discourse products “real” (expectation and pressure) and the recognition to be prerequisite. And “hyper-meritocracy” is involved with the discourse.

【 Keywords: communication ability, communicative competence, Discourse Analysis, hyper-meritocracy, individualization 】